

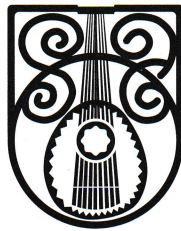
オルケストラ シンフォニカ 東京

第 60 回

定期演奏会

2019 年 4 月 14 日 (日) 午後 2:00 開演

第一生命ホール



第60回演奏会にあたり

本日はオルケストラ シンフォニカ 東京（O S T）第 60 回定期演奏会においでいただきありがとうございます。武井守成が創設したオルケストラ シンフォニカ タケイ（旧仮名遣いではタケキ）が武井逝去により活動を休止した後、新体制で 1959 年に復興演奏会を開催して今回がちょうど 60 回目となります。60 という数字は十干十二支における還暦に対応いたします。敢えて記念演奏会とは銘打ちませんが、この節目の数字を意識して O S T ゆかりの作曲家の曲をいくつか選びました。

まず取り上げるのは O S T 創設者である武井守成（1890 年～1949 年）です。武井は、1911 年 20 歳の時、イタリアに数ヶ月滞在し、そこでギターとマンドリンの音色に魅入られ、その後、ギター・マンドリンに一生を捧げることになりました。宮内官僚の傍ら、1915 年にシンフォニア・マンドリニ・オルケストラ（1923 年にオルケストラ・シンフォニカ・タケキと改称）を立ち上げ、雑誌「マンドリンとギター」（後に「マンドリンとギター研究」と改称）を発刊し、1923 年には全国マンドリン合奏団コンクール（コンクール）を、1924 年には作曲コンクールを始めるなど、本邦マンドリン・ギター音楽の始祖と呼ぶに値する偉大な先輩であります。武井はマンドリン合奏曲・ギター独奏曲の作曲家としても多くの作品を残しています。本日は、武井のマンドリンアンサンブル作品を第 1 部から第 3 部の各指揮者がそれぞれ取り上げております。第 2 部ではさらに、武井の残した多くのギター独奏作品の一つを演奏いたします。

また、旧 O S T、現 O S T には本邦を代表する作曲家が属しておりました。旧 O S T の指揮者として活動し、「軍艦マーチ」や「愛国行進曲」で有名な瀬戸口藤吉を第 1 部で取り上げ、加えて多くの親しみやすい編曲やマンドリン教則本でマンドリン界の底上げに尽力した平山英三郎を第 2 部で取り上げております。

みなさま、どうぞごゆっくりお楽しみください。（O S T 代表 石井啓之）

参考文献：『マンドリン・ギター及其オーケストラ』（1924 年 武井守成著）
『ギターと出会った日本人たち』（2011 年 竹内貴久雄著）

O S T の歴史

- 1915(大正 4)年 9 月：武井守成楽団創設
- 1916(大正 5)年 4 月：楽団名をシンフォニア・マンドリニ・オルケストラと称する
- 1923(大正 12)年 11 月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・タケキに改称
- 1949(昭和 24)年 11 月：戦後初めての定期演奏会開催(第 49 回)
- 1949(昭和 24)年 12 月：武井守成 逝去
- 1953(昭和 28)年 5 月：オルケストラ・シンフォニカ・タケキ 第 55 回演奏会開催
- 1954(昭和 29)年：杉並マンドリンアンサンブル創立
- 1955(昭和 30)年 10 月：杉並マンドリンアンサンブル 第 1 回演奏会(通算 56 回)
- 1956(昭和 31)年 7 月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイに改称 第 57 回演奏会開催
- 1958(昭和 33)年 12 月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイ 解散
- 1959(昭和 34)年 12 月：杉田村雄* オルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興
本楽団第 1 回定期演奏会開催
- 1986(昭和 61)年 7 月：杉田村雄 逝去
- 1987(昭和 62)年 5 月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・東京に改称
- 2016(平成 28)年 11 月：10 月 11 日(武井守成の誕生日)がマンドリンの日と設定される
- 2019(平成 31)年 4 月：第 60 回定期演奏会開催

*杉田村雄（すぎた むらお：1903年2月14日～1986年7月17日）

暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2 人で暁星マンドリン倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。1939 年 O S T に入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係楽譜・資料も戦火を免れる。武井氏逝去後、O S T の再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

プログラム

第一部

指揮： 嶋 直 樹

1. シンフォニア・マーチ 瀬戸口藤吉
2. カルッリを偲びて 武井守成
3. いりあい 武井守成
4. 1月 炉端で P. I. チャイコフスキー (嶋 直樹編)
5. スケートーズワルツ E. ワルトトイフェル (嶋 直樹編)

第二部

指揮： 石 井 啓 之

1. やどかり (ギター独奏 演奏：小林 透) 武井守成
2. 茜 武井守成
3. そよ風の唄 平山英三郎
4. 津軽海峡・冬景色 三木たかし (石井啓之編)
5. 冬の唱歌メドレー 石井啓之編
6. 劇的序曲「細川ガラシャ」 鈴木静一

《 休 憩 20分 》

第三部

指揮： 山 本 雅 三

1. 檳榔子 (びんろうじ) 武井守成
2. 前奏曲 黄昏 (たそがれ) D. ベルッティ
3. カプリッチョ H. ガル
4. 組曲 田園写景 S. ファルボ
 - I. 黄昏の踊り
 - II. セルラテルラ (小さなセレナータ)
 - III. 祭りの朝

曲 目 解 説

第 一 部

シンフォニア・マーチ

瀬戸口藤吉

瀬戸口藤吉（1868年～1941年）は海軍軍楽長。「軍艦マーチ」の作曲者として知られています。海軍退官後1918（大正7）年から6年ほどOSTの初代指揮者として活動しました。今回演奏するマーチは1919（大正8）年に武井が作曲したギター曲「野遊び」をテーマとして私たちの団体（当時の名称はシンフォニア・マンドリニ・オルケストラ）のために書かれたものです。「野遊び」について武井は、「幼き子等が朝目覚めてからの遊びに出て夕方楽しく家路につく迄の描写」と添え書きをつけており、このマーチもそんなイメージで演奏するとよいのかも知れません。

カルッリを偲びて

武井守成

「大ギタリスト、カルッリの肖像を書斎の壁に掲げながらその温厚な風格を偲びその追懐の感情をつづたもの」という作者の言葉が添えられています。フェルディナンド・カルッリ（1770年～1841年）はイタリアの作曲家、ギタリストです。数百ものギター曲を作曲し晩年にはギターを当時の音があまり響かなかったものから現在のような大きな音が出る楽器に改良したことでも知られています。OSTは1916（大正5）年4月に「マンドリンとギター」という小冊子を発行し、1943（昭和18）年11月までマンドリン・ギター研究の発表を続けていました。武井は1917（大正6）年の本誌に三号に渡ってフェルディナンド・カルッリについての文章を載せていますがその中で「カルッリ、その名は永久にギター史の第一頁を飾るであろう」と述べています。1927（昭和2）年4月に作曲され6月に初演されましたがその後OSTの演奏会で取り上げられることはなく、本日が2回目の演奏となります。

いりあい

武井守成

「いりあいの鐘をふと窓辺にきいて、そこはかとなき悲しみと故知らぬ楽しさとを覚えるのは私だけであろうか」

いりあい（入相）とは夕暮れもしくは夕暮れの鐘の意味です。段々と日が暮れていくなかで遠くの寺の鐘が響いているという静かなメロディーの中に3拍子の楽しいリズムが混ざっているのは作者独特の感情の表れでしょうか。1941（昭和16）年11月に初演されました。

「四季」より「1月 炉端で」

P. I. チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840年～1893年）がロシアの音楽雑誌の1月号から12月号にそれぞれの月の性格を音で描写するという企画に基づいて作曲したピアノ曲集、「四季」～12の性格的小品の第1番です。この曲集は後にA. ガウクにより管弦楽曲として編曲されています。今回は元のピアノ譜より

マンドリンオーケストラ用に編曲しました。

暖炉のある安らかな部屋で夜を過ごす平和な気分を表現した曲です。

スケーターズワルツ

E. ワルトトイフェル

エミール・ワルトトイフェル（1837 年～ 1915 年）はフランスの作曲家で、ワルツ・ポルカなど舞踏会で演奏される曲を多く作り、「フランスのワルツ王」「フランスのヨハン・シュトラウス」などと呼ばれました。この「スケーターズワルツ（原題：スケートをする人々）」は日本での人気が突出しており、海外ではワルトトイフェル名曲集などのアルバムから外されることもあるようです。

（文責 嶋）

第 二 部

やどかり

武井守成

武井守成が1944（昭和19）年にギター独奏曲として作曲しました。作者はやどかりを評してこう述べています。「その形態も生活もすべてが滑稽味に満ちたもの、それがやどかりである。借りものの貝殻を背負ってよちよちと歩く、人が近づけば急いで貝殻の中にかくれる。ともかくも面白いいきものである。」

茜

武井守成

武井が1942（昭和17）年に作曲しました。同年5月のOST定期演奏会で作者自身の指揮により初演されました。4分の4拍子で始まる導入部のあと4分の2拍子のハバネラ風のリズムが展開され、中間にタンゴ風の変化が挿入されていますが、作者は「タンゴでもハバネラでもない。赤い淡日さす頃の感情を音にうつした迄」と述べています。

そよ風の唄

平山英三郎

作者の平山英三郎は、「タケキ」時代から長きわたりOSTに在籍し、数多くの作曲・編曲を残し、またマンドリン教則本を執筆し、斯界の発展に寄与しました。現在の日本マンドリン連盟につながるマンドリン弾きの懇話会である「マンドリンの群れ」を作ったことでも知られています。本曲は、1968（昭和43）年発行の「マンドリン名曲集」にも収められています。3連符の連続にそよ風の気持ちよさを感じることでしょう。

津軽海峡・冬景色

三木たかし（石井啓之編）

この曲は、東京を発って本州最北端の青森県にたどり着き、青函連絡船で津軽海峡を越えて北海道に渡る人々を描いた阿久悠作詞の叙事詩に、三木たかしが作曲・編曲して生まれた歌謡曲で、石川さゆりが1977（昭和52）年に歌いミリオンセラーとなりました。大ヒットにより、石川は同年末の第19回日本レコード大賞・歌唱賞、第6回FNS歌謡祭最優秀グランプリ・最優秀歌唱賞などの音楽賞を獲得しました。

冬の唱歌メドレー

石井啓之編

第57回、第58回、第59回で、それぞれ春、夏、秋を取り上げました。今回は四季の締めとして「冬」をテーマにしています。「津軽海峡・冬景色」もそのテーマにのっとっています。今回の「冬の唱歌メドレー」では、時雨音羽作詞、平井康三郎作曲の文部省唱歌「スキー」（1942年）、文部省唱歌「冬の夜」（1912年）、巽聖歌作詞、渡辺茂作曲の「たきび」（1941年）、文部省唱歌「冬景色」（1913年）、文部省唱歌「雪」（1911年）の5曲メドレーでお届けします。「雪」は指揮者の合図で演奏に合わせて歌っていただければ幸いです。

雪やこんこ あられやこんこ
降っては降っては ずんずん積もる
山も野原も わたぼうしかぶり
枯木残らず 花が咲く

雪やこんこ あられやこんこ
降っても降っても まだ降りやまぬ
犬は喜び 庭かけまわり
猫はこたつで丸くなる

劇的序楽「細川ガラシャ」

鈴木静一

本曲は、多くのマンドリンオーケストラ作品を残した鈴木静一の1968（昭和43）年の作曲で、最も演奏される機会の多い曲の一つといってよいでしょう。細川ガラシャは、織田・豊臣時代の動乱の世に明智光秀の三女に生まれ、細川忠興に嫁いだが、父光秀の謀反により反逆者の娘として多難な日々を送ることとなり、救いを求めキリシタン信仰の道に入りました。しかし、最後は秀吉亡き後、石田三成からの人質要求に屈することなく、自らの決意で臣下の刃先を胸もとに受けて火中に苦悩の生涯を閉じました。本曲はその悲劇の生涯を劇的に描いています。

（文責 石井）

第三部

檳榔子（びんろうじ）

武井守成

檳榔子とはマレーシア原産のヤシ科常緑高木の檳榔樹の果実。暗紅色で鶏卵ほどの大きさがあり、薬用、染料とするため奈良時代の756（天平勝宝8）年ころにすでに輸入された記録があるそうです。

本曲は1943（昭和18）年の作曲で同年武井自身により初演され、翌年1944年11月にはビルマ国代表パーモ氏来日午餐の節においてガエタノ・コメリ氏指揮のもと、宮内省管弦楽により演奏されました。

現代においてさえ新鮮さを感じるほどの、変拍子を用い、テンポとリズムが目まぐるしく変化する斬新な手法は、発表当時の戦時下において、果たしてどのように聴衆に響いたのでしょうか。

前奏曲 黄昏（たそがれ）

D. ベルッティ

第一次世界大戦後の沈滞していたイタリアのマンドリン界に新風を吹き込んだディーノ・ベルッティ（1893年～1947年）の1936年の作品です。静かに低く響くマンドロンチェロのシンコペーションのリズムに始まり、感傷的な旋律が美しいハーモニーに優しく支えられながら起伏を繰り返し、徐々に徐々に高揚クライマックスを迎えた後、またもとの静けさに帰り消えていきます。小品ながら深い精神性、感情の揺れを感じる作品です。OSTでは同じ作者の「ハンガリアの黄昏」を昨年演奏いたしました。

カプリッチョ

H. ガル

ハンス・ガルは1890年オーストリアのウィーンに生まれ、後半生はナチスを逃れてイギリスに渡り、スコットランドで活動した作曲家・指揮者・ピアニスト・音楽学者（1987年没）。ブラームスの孫弟子にあたり、ウィーンの後期ロマン主義音楽の伝統を守り抜くことに努めました。

歌劇、管弦楽、各種器楽曲などと共にマンドリン合奏曲を作曲したことは興味深いところです。カプリッチョはイタリア語では気まぐれの意味で、形式が一定せず自由な機知に富む小品です。狂想曲または奇想曲と訳されます。（1949年の作品）

組曲 田園写景

S. ファルボ

「ファルボが死んだ。4月8日、その故郷シチリア島のアヴォラで、短い患いの後に、あの世に旅立った。ラウダス、ボッタキアリ、ミラネージ、アマデイ、マネンテ。マンドリンオーケストラ曲の作家として知られている人達を顧みる時、彼ファルボがいかに大いなる光明を放っていたかが今更に思い起こされる。ラウダスと彼とは現代の双璧であるが、いずれがより大きな仕事を残したかと言えば（ラウダスの未来は勘定に入れないが）どうしてもファルボに軍配があがる。ああ、彼は死んだ。」

武井守成が1927（昭和2）年に「マンドリン・ギター研究」によせた一文です。サルヴァトーレ・ファルボ（1872年～1927年）の偉大さがよく伝わってきます。

本曲はマンドリン音楽がイタリアで最盛期を迎えていたころの1911年1月にミラノの「イル・プレットロ」誌主催の作曲コンクールで金牌を獲得し、古典的なマンドリンオリジナル曲の最高峰の一つと言える作品です。

ちなみにファルボは翌1912年には「二短調序曲」で、1922年には「組曲スペイン」でともに1位を受賞しています。曲名は当初「組曲田園」でしたが、後に改作され「田園写景（しゃけい）」となりました。（Suite Compestre→Scene Campestre, Suite）

OSTでは1924（大正13）年大沼哲指揮にて本邦初演、1928（昭和3）年に菅原明朗指揮にて改作での再演との記録が残っています。写生、借景という言葉はよく使われますが、写景は普段ほとんど聞かれません。しかし曲のイメージとマッチして斯界ではすっかり定着し馴染んだ訳名となっています。I. 黄昏の踊り II. セルナテルラ（小さなセレナータ） III. 祭りの朝、以上3曲からなる組曲で、田園地帯の人々の様子が、軽快にリズムカルに、そして躍動感にあふれ生き生きと描かれていきます。

（文責 山本）

出 演 者

指 揮 者： 山 本 雅 三 嶋 直 樹 石 井 啓 之

コンサートマスター： 田 中 尊 子 小松崎美奈子

第一マンドリン： 田 中 尊 子 田 島 明 子 金 勝 溪 子 本 間 輝 樹
 小松崎美奈子 大 口 千 秋 神 敏 子 新 美 恵 子
 内 野 典 子

第二マンドリン： 富 田 容 子 木 村 栄 子 中 村 順 子 岩 崎 宏 子
 高 嶋 明 美 後 藤 俊 明 渡 辺 か お る 宮 澤 八 重 美
 鈴 木 園 子 宇 野 弥 生 小 林 悦 子

マンドラテノール： 新 谷 文 子 滝 田 ふ さ 子 渡 辺 清 荏 本 妙 子
 阿 形 佳 美 田 中 倭 文 子 伊 藤 安 子 関 谷 裕 子
 ★宮 崎 俊 行

ギ タ ー： 小 林 透 平 田 陽 一 門 田 雄 二 原 島 美 歩
 高 嶋 典 子 戸 次 脩 船 崎 薫 澤 田 行 雄
 五 十 嵐 豊 山 崎 豊

リュートモデルノ： 嶋 直 樹 石 井 啓 之 山 本 雅 三

マンドロンチェロ： 田 村 美 恵 子 澤 田 理 恵

マンドローネ： 小 川 眞 寿 美 ★加 藤 純

コントラバス： 佐 藤 正 石 黒 不 二 夫 ★樺 澤 と も 子 ★清 水 威 志

フ ル ー ト：★松 尾 圭 子

クラリネット：★福 嶋 美 香

ピ ア ノ：★浦 畠 晶 子

打 楽 器：★飯 野 晶 子 ★松 岡 雅 史 (★=賛助奏者)

《第61回定期演奏会のお知らせ》

◎日時：2020年4月12日(日)午後 2:00 開演 ◎会場：第一生命ホール(晴海・トリトンスクエア)

連絡先：石 井 啓 之
 E-MAIL：hi@ishii164.net
 ホームページ：http://ostokyo.info/